

外国語教育における視聴覚的方法 と 教材 *The Sadrina Project* の分析とその諸場面

河 野 護

はじめに

本学に1979年に就任して以来現在まで筆者は25年間 LL 授業を主として担当してきた。その長い間自分の専門である視聴覚教育を外国語教育においていかに適用していくべきか、その理論と実践の方法を研究しつつ、ついにここまで来てしまった。筆者は、それ以前をも含めて、この課題の追究に終始試行錯誤してきたという言うべきであろうか。

安田一郎教授は、先生ご自身の退任記念号である本紀要8号にて発表された「言語教育の究極的アプローチを求めて」という論文の中で、“究極のアプローチ”を生涯追い続けられた教授法学者としてのご自分の研究成果を論述された。“永久に「到達」することのないアプローチは、それを求めて走ることに意味があるのかもしれない。虹を追う少年のように。”と結ばれた最後の記述が印象的であった。

安田教授は、教授法は“言語学と密接に不可分の関係にある”との立場より言語学の研究成果と関連させながら教授法のあり方を追究されてこられた。それに対し、異なる分野から外国語教師となった筆者は、視聴覚教育が外国語教育にいかに関与できるか、その追究に終始苦闘してきたというのが偽らざる事実である。応用言語学の1分野である外国語教授法の研究に比して、一般的教育研究はより巨視的、社会学的見地からの研究が多く、視聴覚教育研究においても科学的数量的な実験にもとづいた研究発表も多々あるが主観的論文が多いことも否定できない。筆者が本稿で述べる内容も客観的データに基づいた論文ではない。文献研究にもとづいてはい

るが主観的に論述することを事前に断っておく。

しかし、筆者は長期にわたる経験の蓄積から筆者なりの外国語教育における視聴覚的方法の理論と実践の方法を確立してきた。最近10年余の筆者のLL授業は現在の外国語教育の目標達成に大いに貢献しうるものと確信している。学生から悪くはない評価を受けていたことも貢献しうることの証であろう。

退任に当たり、この特殊分野を己の研究テーマとして生涯を賭けて追究してきた筆者として、己が辿り着いた筆者なりのLL授業のあり方、外国語の実践的コミュニケーション能力を養うためのLLにおける教授法の理論と実践の方法について、この紀要に述べさせていただく。

本稿では、前半にて実践的コミュニケーション能力を養成するためのLLにおける教授法の理論的裏づけとその実践方法を概説する。その後、本学において1991年より利用してきた表題の教材を、この授業を受講した学生に懐かしく思い出してもらうとともに、多少なりとも活用してもらえるように、授業中に学んだ英語を分析整理して掲載したい。本稿が筆者の拙論だけで終わることなく、学生の今後の利用に供したいと思うが故である。過去の受講学生や一般の学生が読んでこの拙稿を活用してくれば幸いである。

I. 英語教育における視聴覚的方法

1. 経緯

筆者が大学院を修了した1960年代は教育方法の研究分野は視聴覚教育が特に注目され始めた頃であった。全国規模の研究協議会が組織され大学院の修士課程にその専門課程が開設されたのもその当時であった。筆者はこの領域、特に外国語教育における視聴覚的教授法の可能性に学部時代より興味を抱き、大学院においても引き続き視聴覚教育を専攻することになった。

1960年代英語教育を重視している大学ではLLが次々と設置されていった。この時代の流れによって筆者の生涯が支配されていくことになった。

1964年修士課程終了後しばらくして筆者は私立大学の外国語学部に採用されることになり LL の授業を担当し始める。その後大規模な新設の国立大学が誕生することになって、その大学では旧来の外国語教育とは異なる実用重視の外国語教育が強調されて最新鋭の LL などの諸施設が設置されることになり、筆者も開設の当初から関係し施設設置の準備から実際のその教育に参加すべく初年度より尽力することになった。この両大学における経験が筆者に大きな自信を与えてくれたことは否めない。が、一方、LL 教育に対し大きな疑問を抱き始めたこともこの頃であった。そのような折に1979年成城大学に招かれた。

教育者は被教育者から尊敬され授業は受講するに値する価値があり効果を上げると後者から十分な評価を受けるような授業でなければならない。また、可能な限り授業は楽しいものにもしたい。筆者が本学に就任以来追究し始めたことはまさにこの点であった。LL 内で機械と対面しながらマイクやヘッドフォンを通して教育するのではなく、人と人が直接対面して肉声を通して話し合っていく LL 教育の方法を試行し始めた。幸い、最近の10年ようやくそのように感じられる授業を実践していると思えるようになってきた。その原因は意外と自ら構築した理論や実践の方法にあったというよりは偶然発見した表記の教材との遭遇にあったのかも知れない。教材の内容が授業の価値や効果を定める重大な要因になることもまた確かである。

CNN などの衛星放送が開始されインターネット情報が容易に活用できるようになってからは、外国語教師は現在使用されている外国語が直接生で日常接することができるようになり、すぐにそのトランスクリプトがインターネットで入手できるようになった。毎日接している情報の中に教材として利用できる内容的にもよい素材が容易に見つかる時代になった。一方、工学の発達により精巧なる機器が次々と出現して教材の制作や提供の方法も極めて簡便になった。筆者はこのような双方の恩恵を最大限に受けている外国語教師の一人であろう。しかし、外国語教育の原点を決して忘れてはならない。いかにしてコミュニケーションができる力をつけるかと

いう一点である。いかにして口語の外国語教育の目標を達成するか、その目標から外れた教授法はLL教育としては効果を挙げ得ないことを担当者は銘記しておかなければならない。

2. 大学における口語の外国語教育

外国語の、特に口語の、コミュニケーション能力の養成は、その言語が話されている国や社会においてその言語を使用していく直接体験を通して習得していくのがもっとも効果的な学習方法である。この体験の蓄積なくしては外国語によるコミュニケーション能力をマスターすることは不可能に近い、と言っても過言ではない。その点読解力や書く力の文字を介しての外国語の習得の方法とは大いに異なる。勿論両能力は互いに影響し合う関係にあるが後者の指導のみを通して前者の養成は至難の業であることは日本の英語教育の実情が証明しているところである。

現行の中学校・高等学校の学習指導要領は外国語教育の目標をこのように掲げている。

中学校（必修化）

外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くことや話すことなどの実践的コミュニケーション能力を養う。

平成10年告示・平成14年度施行

（下線筆者）

高等学校（必修化）

外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や相手の意向などを理解したり自分の考えなどを表現したりする実践的コミュニケーション能力を養う。

平成11年告示・平成15年度施行

（下線筆者）

現在は口頭によるコミュニケーション能力の育成により力点を置いていることがよくわかる。では、大学においてはどのように考えるべきであろうか。筆者は大学における外国語教育の目標もこの延長線にある必要があると考える。が、大学は学問研究という重大な任務も負う以上それを達成するための外国語の教育が第一義であることも否定できない。しかし、前者も無視してはならない。特に国際的に活躍するために必要な外国語の能力をつける必要性が大きくなった現代、大学においても口語の外国語教育が重視されなければならなくなったことはどなたも否定しえないであろう。実際にそれが重視されてきている所以もその辺にある。大学にも LL の授業があり外国人による直接外国語で教える授業も多量になり日本人でも英語で授業を行う人も次第に多くなってきている現代である。

3. 教育とは、視聴覚教育とは

教育とは

知的分野における教育とは単純に概念形成である、と筆者は定義している。その概念は言語によって形成され、一方、教育はコミュニケーションそのものでもある。そして、このコミュニケーションは主に言語で行われているのが日常行われている教育である。外国語による教育以外は勿論第一言語（日本語）で行われる。

しかし、ここに大きな問題が生ずる。教育レベルが高くなればなるほど言語偏重主義に陥りやすくなることである。そして所期の効果を上げえない。その原因は周知されているごとく、言語自体がもつコミュニケーション機能の欠陥そのものに由来する。即ち、1. 言語は抽象である。2. 言語は時間系列でしか述べられない。3. 言語のみによるコミュニケーションにおいて話される言語は自然な状況において話される言語とは異質な言語となる。これらを筆者は言語の3大欠陥と称しているが、この欠陥に起因して教育の効果が上がらないのである。

一方、視聴覚的方法においては、直接体験を通して視覚情報が得られるため、1. 言語は具体と結びつき、2. 多量の情報を同時に組織的体系的に

提示でき、また、3. そこで話される言語は自然な言語になる。

現在はコンピューター時代になって、教育の定義も「教育とは、一連の学習状況を作って、人の学習を促進する営みである」¹⁾と、教師をも含めた教育メディアすべてを包含する定義にならざるをえない。ハイパー・メディアが出現し、ソフトも小学生からそのハードを使用してハイパー・テキストで学ぶ時代となると、「静的な知識の獲得」だけでなく「動的な知的能力の獲得」または、「思考力の形成」が必要になってきて、「学習の仕方を学習する」、「自分の目的に合致するように主体的に情報を取捨選択する能力」や「情報を生産する力」も指導しなければならない。教室で一方的に教えることでは終わらない。

外国語教育においても、外国語を習得する方法を学ぶこと、習得する方法についても指導する必要がある。インターネット時代になりデジタル通信となって、現代は外国語教師にとって過去と比較にならないほど有利になってきた。24時間視聴できる CNN や BBC その他のテレビ放送、ネット上に流される多量の外国語によるマルチメディア情報。それらはハイパー・テキストであるので我々は己の好きなようにアクセスできる。生の外国語が自分の部屋の中でも自由に接することが可能である。そして、いとも簡単にプリントアウトでき編集も可能になった。教材作成は非常に簡単である。このような利点を活用して筆者は授業をしている。また、どのように外国語を習得したらよいかについてその習得方法についても指導している。

視聴覚教育とは

波多野完治²⁾は「理性的の把握を与えるために、言語を伴う、豊かな、感性的体験をあたえるもの」と初期に定義し、その後「感性的方法を使用しながら、被教育者の理性的認識を高め、これを永続的にし、かつ、実践的にするための努力である」と改めている。その後教育工学が発達してきて視聴覚的方法を道具的概念として捉えることからプロセス概念として考えるようになり、中野照海³⁾は「視聴覚教育とは、教育行為を最適(効果的)

とするために、画像メッセージと言語メッセージの特質を明らかにし、これを具体化としての教授メディアの制作、選択、および、利用を主たる課題とする教育理論・実践の分野である」と定義する。

筆者は、教育の基本的行為である教室における教育だけに限定して単純に、「教育目標を達成するために、画像メッセージと言語メッセージの特質を効果的に活用する教育方法である」と定義する。

4. 外国語教育における視聴覚教育の特殊性

外国語教育における視聴覚的方法は、他の諸教科におけるような第一言語（日本語）による視聴覚を使用しての教育とは根本的に異なることを認識しなければならない。この差異を発見したのは筆者が本学に就任した後のことであった。P. Riley⁴⁾ の次の文献を読んだときであった。

We need to get out of our heads completely what we might call the 'audio-visual course' notion of the role of non-verbal features. There, the gestures, pictures, etc. are as a gloss, as a parallel code to reiterate and explain the message being transmitted orally; a customer ordering fish in a restaurant has a little bubble containing a picture of a fish coming out of his head. This relationship – parallel coding of the same message – is totally different from the integrated and cumulative role played by non-verbal features in face-to-face interaction, where they converge to contribute to a final message or meaning of which they are an intrinsic part.

視聴覚講義で学ぶ非言語メッセージの役割などまったく忘れてしまえ、と言う。一般視聴覚教育講義で学ぶ理論（第一言語による他教科の視聴覚的方法）では、画像メッセージは言語メッセージの内容と同じ平行記号としての画像であって具体としての画像メッセージの利点を使って教育を効果的にしようとするのに対し、外国語教育におけるそれは外国語で話されるときに視覚的に捉えるさまざまな非言語情報のすべてを含む体験内の

非言語メッセージを活用することであって、それらのメッセージは統合され蓄積され収斂していったりそれらが言葉の最終的意味を決定していく重要な機能を画像が果たしていることである。

筆者は外国語教育の特殊性（差異）を3点にまとめている。

1. 外国語教育においては、平行記号としての画像メッセージも有効であり大いに活用しなければならないが、言語が話される場そのものの総体（以下筆者はこれを“まるごと体験”と呼ぶ）の中に含まれる言語理解に直結するさまざまな視覚的に捉える画像メッセージの方がより重要である。
2. 他の教科におけるように理解できる日本語による教育ではなく、ほとんど、または、まったく理解できない外国語による教育であること。あまり理解できない学習者に外国語で流暢に話してかけても内容理解は至難の業である。筆者はこの点を、「学習者は言語的に白紙である」と言っている。
3. 外国語教育においては学習者は「文化的にも白紙である」。外国語教育と言うのが外国文化も教えなければならない。言語を学ぶときにはそれに関わる文化を視覚的に見せることから始めなければならない。第一言語習得も視覚的に捉えることから始まるように、外国文化を視覚的に見ることから始める。未知なことや経験したことがないことは想像もつかないことが多い。

5. “まるごと体験”の重要性

外国語教育における視聴覚教育の最大の貢献は教室において学生に“まるごと体験”を提供できることにある。外国語習得は外国語が使用される場面を“まるごと体験”させることから始まらなければならない。“まるごと体験”とはネイティヴによる直接その外国語を使つての授業ということではない。ネイティヴによる非視聴覚的な授業はさほど効果は期待できない。前述のバーバリズムの弊害があるからである。“まるごと体験”とは、外国語が話されている国ないし社会において実際にその言語に接し使

用しながら習得していける体験そのものであるが、その外国語が話されていないところで習得しなければならない場合では（日本においては）、それに代わる代理経験としての、言語に関わるすべての画像メッセージを含む視聴覚体験の総体である。この体験の蓄積こそがコミュニケーション能力をつけていく基盤になる。日常行われている授業のように、やがて使うために外国語を学ぶのではなく、視聴覚体験の中で言葉を日頃使用しながら体験を蓄積していくのである。外国語は使いながら次々と新しい単語や表現を獲得していくのが実践的コミュニケーション能力を養う最良の方法である、という結論に筆者は到達した。そのような視聴覚体験を蓄積させていけるような授業を LL にて展開していく。

聞き話す能力は文字を読むことや LL でしばしば行われている音声だけによる聞いたり発声したりする（話すではない）訓練からはその力はない。LL 授業はまずは外国語の“まるごと体験”をさせることから始める。その中で聞き話す体験を積んでいく。その重要性は自然な言語使用の“まるごと体験”の中に多様な画像メッセージの機能にあり、次のような言語伝達に関わる重要な機能が含まれているからである⁵⁾。

The communicative functions of the visually perceived aspects of interaction

- | | |
|-------------------------------|-----------------------------|
| 1. The Deictic function | 4. The indexical function |
| 2. The interactional function | 5. The linguistic function |
| 3. The modal function | 6. The situational function |

この6つの機能のうち1, 4, 6が初級の学習者にとっては特に大切であると考えられる。視覚的に見ている画像メッセージの中には、1の「直示機能」により言葉を聴いているときその言葉の意味するものが直接見られる機能が画像にある。たとえその単語を知らなくとも知る前に実物そのものを知覚して見ながらその意味を推測しその直接体験を通してその言葉を覚えていく。

2の「表示機能」とは、視覚的に見られる話し合っている人物それぞれ

が発話の内容に係る多数の情報を発散していることであり、この情報のために話されている会話の内容が推測可能となり理解しやすくなる。

また、1 から 5 までのすべてを含む機能である 6 の「場の機能」は、総合的にもっとも大切な視覚情報である。どのような場面でどのような人々が何について話し合っているのか、画像メッセージが会話の内容を予測可能にし理解しやすくさせるのである。

しかし、このようなコミュニケーション研究の結果による一般に知られている理論よりも現実により大切なことは、LL にて教師と学生がビデオなどの映像教材を通して内容的に意味があり興味も尽きない“まるごと体験”を共通に体験することである。この体験を学生教師双方が視覚的にも同じ体験をすることが、次に展開される活発なコミュニケーション活動につながっていく。静止画面を一緒に見ながら積極的に外国語で話し合っていけることに最大の意義がある。外国語による活発なコミュニケーションを成立しやすく積極的に話そうとする態度を養う絶好の場を映像が与えてくれるのである。

“まるごと体験”の中に含まれる画像メッセージの機能をまた別の視点から見てみる。画像メッセージと言語メッセージは互いに作用し合って言葉の意味を決定していく。この相互の関係も“まるごと体験”内の画像メッセージの機能として重要な働きをしている。次の英文中の下線を施した画像情報が引用符内の発話行動やその発話内容にどのように影響しているであろうか。a から f の 6 の機能の内いずれかの働きをしている⁶⁾。

- | | | |
|------------------|------------------------|-----------------|
| a. repeating | b. deceiving/revealing | c. substituting |
| d. complementing | e. accenting | f. regulating |

1. “I’ll see you and raise you five bucks,” Kelly said with his poker face.
2. Lilly knew her father wanted to talk. She could feel his steady gaze upon her. As she turned and looked at him, he said, “Lily....”
3. Ed slammed the book shut. “Oh, what’s the use! There’s no way I’ll learn

all this by tomorrow!”

4. They were not allowed to say a word, but you knew exactly how they felt by looking at their faces.
5. “You don’t believe it hurt, huh? Well, just let me shove you the way that idiot shoved me. You’ll see!”
6. “Me?” said Jose, with wide, innocent eyes, pointing his index finger to his chest. “I’d never do something like that!”

(下線, 配列変更筆者)

1 では支払う意思がないケリーの無表情な顔を読み取らなければ言葉通りの発話の意味と誤解してしまう。視覚的に彼のポーカークフェイスを読み取らなければならない。画像メッセージの機能は (b) である。2 では父親のじっと見ている視線が“リリー”と話しかける合図になっている (f)。3 の本をバタンと閉める行動は話の内容を強調している (e)。4 ではお互いに顔を見つめることで言葉で話し合わなくとも視覚のみのコミュニケーションが成立することの一例である (c)。5 では言葉で話していたがその後は言葉では表現しがたいため “You’ll see!” と言ってから行動で言葉の不足部分を補充する (d)。6 の例は “Me?” と言いながら人差し指で胸を指す行動とともに同じ意味であるから映像の機能は (a) の反復となる。

以上のように言葉によるコミュニケーション中にもさまざまな非言語によるコミュニケーションが行われており言葉だけを聞いては言葉の真意を正しく理解できない。従って、話し言葉の教材提供は文字や音声だけでなく言葉に関わるすべての要素を包含している“まるごと体験”を与えなければならないことは自明となり、視聴覚的方法なくしてそれを提供することは不可能なのである。

6. LL 教室において外国語のコミュニケーション能力の養成は可能か

LL は機械を備えた外国語練習室である。が、日本の大学では LL を独立した授業として学生に受講させている大学が多い。筆者の長い個人的経

験や、旧 LLA 学会、現外国語教育メディア学会などでの学会や諸研究会などを通して、わが国における LL 教育の実態は相当知っているつもりであるが、筆者は LL 授業が話し言葉の本来の教育目標を十分達成していると思われるような LL 授業をあまり見学したことがない。特に最近コンピューターを供えた CALL ラボが出現して以来、その教授法は視聴覚教育の原点からさらに乖離していく方向に進んでいるのは嘆かわしいことである。

話し言葉の習得においては“まるごと体験”を通して話されている言葉を聞き自分もその中で話す体験を多量に積んでいくことこそが話せるようになる方法である。実際に話す体験をしなければ習得はできない。LL 内でもこの事実は決して忘れてはならないことであって、機械を使用しての練習のみに終わっては決して目標達成はできない。ましてやゲーム機に向かうような個人練習が多くなる CALL ラボではいかにして外国語で話し合う時間がとれるのであろうか。LL にもヘッドセットを通した練習だけで終わることなく、教師と一緒にいられる授業のときは可能な限り多くの時間をとって全員で外国語で話し合う真のコミュニケーションをする時間を多量に作らなければならない。

筆者が辿り着いた LL の教授法は、まずは、既述の理論にもとづいた“まるごと体験”のすばらしい映像教材を見せることから始まる。その内容に学生が興味を示しかつ学生の必要にも直結した教材を使うことである。そして、その映像教材を見せて、その後には活発なコミュニケーションを展開する授業をするのである。こうすればある程度まで目的を達成することができる。週一回の授業で十分に達成することはさほど期待できないが、学生に外国語の学習理論を納得させ習得の方法を体得させれば、その後は学生は生涯努力を続けていくであろうと期待できる。

LL 授業の成功の条件は教師学生の双方にある。筆者はそれぞれに3つの条件を設定している。

教師の3条件：1. 外国語と外国の文化について精通しその外国語が話

せること

2. 教授法を理解し実践できること
3. 学生に信頼され好かれること

- 学生の3条件：1. 外国語を話す必要性があること
2. 外国語に興味を持ち積極的に話すこと
 3. 学んだ外国語を利用すること（外国語で思考すること）

後者の学生の3条件について、Jacobovits の次の記述は外国語をマスターしたいと決意する学習者が銘記すべき条件として忘れてはならない事項である。一方、教師も教室にてこのように配慮した指導をしない教師は口語の外国語を学生に習得させることは不可能であろう。Jacobovits は教室内における成功の条件を次のように述べている⁷⁾。

Can Bilingualism Be Achieved in the Classroom?

1. Developing communicative competence in a language requires conditions in which communicative needs exist. The degree of communicative competence acquired by an individual is proportional to the extent of his communicative needs.
2. Achieving functional bilingualism in the classroom requires a fairly high degree of FL aptitude.
3. Achieving functional bilingualism in the absence of extensive contact with unilingual native speakers requires an integrative orientation on the part of the learner.

1. 教室内で外国語を話す必要がない授業では学生は決して話せるようにはならない。コミュニケーション能力の獲得はコミュニケーションをし

なければならない必要度に比例する。2. 学生に高度な適性がなければならないと述べているが、筆者は適性というよりは興味と積極性があればある程度習得できると考える。そして、3. 授業を成功させる上で最も肝心な要件は、日常外国語を話す機会がほとんどない学生には授業終了後次回までに学んだ外国語でしっかりと考えさせることであると、筆者は結論する。わが国におけるように実際に使うことがほとんどない不利な条件を克服するには、教室内で体験したことを外国語で言えるように自分で訓練することである。映像で見たことや映像内で話し合われていたことを外国語で言えるようにする。言えるようになるためには未知の単語や表現は否応なく覚えなければならないから、この訓練を積むことによって次第に話せるようになっていきコミュニケーション能力は徐々に養われていく、と筆者は確信するようになった。筆者は学生に強制的にこの作業を課している。その発端は Gouin の言語習得理論にある。

7. 経験の言語化と“incubation”の重要性

Diller は Gouin が100年前に The Series Method を考案するに至った経緯を詳細に述べている⁸⁾。Gouin はある日3歳になる甥の1日の行動を観察してその子の言語習得の過程を観察して2つの重要な洞察を得た。そこで彼が知見したことの要点のみを抜粋すると、

Language learning was primarily a matter of transforming perceptions into conceptions.

Language, then, is not so much an arbitrary set of conventions to be used for communication as it is a means of thinking, of representing the world to oneself.

Language acquisition is not a conditioning process in which a person acquires the habit of saying certain things in certain situations; rather, it is a

process in which the learner actively goes about trying to organize his perceptions of the world in terms of linguistic concepts.

言語習得とは外界で知覚したことを言語化していくことであり、言語とは使用される表現の体系というよりはむしろ思考する手段、外界を自分に表現していく手段であることに気づいた。そして、知覚したものを言語化していくとき子供は事実から事実へ (from fact to fact), それから、それから (and then, and then) と言いながら自分が体験したことを話していく。このことが Gouin が気づいた第一の洞察である。

第二の洞察は、甥は帰宅後、その日に体験したとをすぐに話すのではなく、しばらく incubate (抱卵) して体験したことを頭の中でまとめ、その後順次話していったのである。

For an hour after his return home, the child was silent, digesting this experience in his mind. Then he began step by step telling everybody what had happened.

Gouin はこの観察を通して次のような重要なことにも気づいた。

Gouin noticed that it takes a few days for a new concept or expression of language to settle itself in the memory. A language learner must be careful to use his newly acquired words and rules rather frequently for a few days before he lets them repose in his memory – he must use them at least in thinking if not in speaking or understanding.

未知の単語や表現が記憶に定着するためには数日かかり学習者は積極的にそれらを使用していかなければならないこと。たとえ、話し相手がいなくとも自分の頭の中で少なくとも考えながら使用していくこと。換言して、彼の言う incubation を重視し、特に話す機会が少ない日本の学生には

このことを十分認識させる必要がある。体験したことを次回の授業までに時間をかけてしっかりと外国語で言えるようにしてくる。そして、次回の授業では教室にて incubate したことを話させる機会を作ってあげる。皆で話し合う機会をつくる。筆者は、Gouin の Series Method は視聴覚教育理論に沿った言語習得理論であり、わが国における英語教育にも十分適用できて、かつ、効果も期待できる教授法である、と確信した。筆者は以上のような理論にもとづいてこの10年余 LL 授業を実践してきた。

8. 視聴覚的方法の効果

視聴覚教育に関心がない教師は多い。特に言語教育に関係している教師ほど多い。それは、第一言語であれ第二言語、外国語であれ、言語を教えること自体が目標であるから、言語そのものに注目し、文学や文化をも重視はするが、視聴覚教育を重視する教師は少ない。その原因は言語と映像の関係についての不理解に由縁するすることにもある。次のような実験結果は語学教師に画像メッセージの重要性を誤解させやすい。Mueller の実験の結論部分のみを記載する。Mueller はアメリカの大学における外国語としてのフランス語の授業において実験を行った⁹⁾。

More specifically, the degree to which contextual visuals can be expected to enhance listening comprehension is a function of the degree to which they provide contextual cues which may otherwise not be available to the students. The visuals do not seem to enhance comprehension, however, if because of more extensive language skills the student is able to derive a context from the linguistic cues provided. In this case, the contextual visual seems largely superfluous. In short, the effects of contextual visuals seem inversely related to the students' level of language proficiency.

文脈を表す絵がどれだけ聞き取り理解を助けるかその助ける程度は描かれている手がかりとなりうる量の関数であること、学生の言語能力と反比

例する、と結論付けている。即ち、できない学生にとっては助けになるが、できる学生にとって絵は単なるお飾りにすぎない。

このような実験結果は語学教師の誤解を招きかねない。そもそも外国語教育の最終目標は映像などの助けを借りないで言葉だけで理解できる力をつけることが目標なのであるから上級になるにしたがい視聴覚的方法には配慮しなくなる。

この実験における絵は平行記号としての絵である。日頃教室で絵を使って英語でプレゼンテーションをする。学生に理解しやすくするために絵を使うのであるが、この場合絵が示す内容は英語の話の内容と同じである。平行している。絵は平行記号としての絵である。このような場合絵が聞き取り理解に及ぼす効果は Mueller の結論通りであろう。高度な能力を持っている学生ほど絵は必要ない。不要と言ってもよい。

しかし、外国語教育における画像のより重要な使命は、記述したごとく、平行記号としてのそれよりは“まるごと体験”としての言語使用場面の提供である。そこにおいては学生の言語能力とは関係なくすべての学生にとって映像は必要なものとなる。視覚的に捉えるメッセージを理解しなければ言葉を正しく理解できない。テレビでドラマを見ているとき画面を見ないで言葉のみ聞いていては、言葉自体も正しくは理解できないし感動できず、悲劇の場合涙は流れてこないであろう。

“まるごと体験”における映像は、記述のごとく、画像メッセージに6つの機能があるとともに画像と言語の相互間にも6つの関係があつて、それらを考慮すると、計量不能であつても外国語教育にとって欠くべからざるものであることは明白である。

9. 画像メッセージのマイナス効果

“まるごと体験”は外国語教育に不可欠なものであると言っても、まるごと体験の中には言語理解と無関係または理解を阻害する情報も多量に含まれていることにも注意しなければならない。外国語が理解できない学生はそのような情報に惑わされて映像を見ているためにかえって話されてい

る外国語を理解できなくなってしまうことが多い。

それ故映像は不要であると判断されては困る。確かに理解を阻害するメッセージも多量にあるが、画像が果たすべき役割の方がそれ以上に大きく、筆者は以下のように考えている。

1. 画像は外国語の理解を助ける。
2. 助けないとしても学生と教師が共通の体験をする。
3. その共通の体験が活発なコミュニケーション活動を可能にする。
4. 言語が画像とともに記憶される。
5. その画像記憶が言語記憶を長期化しかつその言語の再生を容易にする。

このように考えて筆者は積極的に映像教材を活用している。

10. 言語の5技能

画像内に含まれる言語理解に直結するメッセージに注目する力も外国語能力のひとつとして考えなければならない、と筆者は主張している。下記の図は Freezel の論文¹⁰⁾ の中に見つけた図であるが、筆者はこの図のみを

図 1

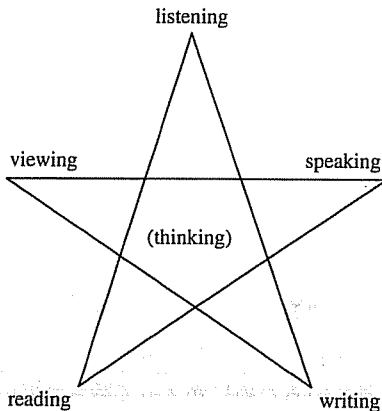
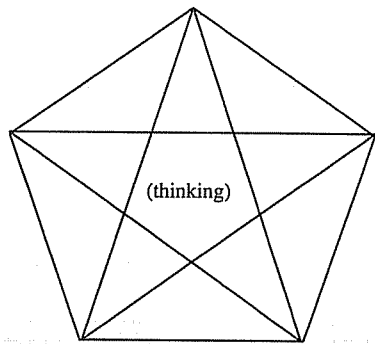


図 2



借用して自己の言語習得理論の骨格としている。

一般に言語の4技能と言うが、図1に示されるように筆者はそれに viewing の能力も付加する。そしてもっとも肝心なのがそれら5技能の中心に thinking の能力が関与していることである。この thinking の力の養成こそが外国語教育にとってもっとも重要視されなければならない。また、外国語学習とは図1の5つの頂点を繋いだ図2に示すような五角形のダイヤモンドをバランスとって磨くことである、とも言える。Thinking はそのすべての能力の根底にあってそれなくしては視覚的に理解することも聞いて理解したり話すことも、まして、読んだり書いたりすることはできない。筆者は口語の指導においても外国語で思考する力をつけるよう努力してきた。その習得理論は理性主義的言語観にその基礎を置いている。

11. 視聴覚的方法を支持する言語習得理論

外国語教師はどのような言語観を持ち、その言語観に基づいてどのように指導していくのか、その指導の理論的裏づけをしなければならない。Diller はすべての教授法を、経験主義と理性主義の2つに大別しそれぞれのモットーを以下のように示している¹¹⁾。

The Empiricist Approach of Structural Linguistics

1. Language is speech, not writing.
2. A language is a set of habits.
3. Teach the language, not about the language.
4. A language is what its native speakers say, not what someone thinks they ought to say.
5. Languages are different.

The Rationalist Approach to Language Learning

1. A living language is characterized by rule-governed creativity.
2. The rules of grammar are psychologically real.

3. Man is equipped to learn languages.
4. A living language is a language in which we can think.

経験主義にもとづく言語観は、言語とは話すものである、ということになるが、言語は話すよりも思考する道具である。言語は習慣の体系ではなく文法に支配された創造性に特徴があり、パタン・プラクティスによる習慣形成よりは文法もしっかりと意識させて習得させなければならない。生きた言語とはその言語で思考できる言語である。

12. 外国語習得の定義

外国語をマスターしたとはどのようなときであろうか。Fries は次のように定義している¹²⁾。

A person has "learned" a foreign language when he has, first, within a limited vocabulary mastered the sound system (that is, when he can understand the stream of speech and achieve an understandable production of it) and has, second, made the structural device (that is, the basic arrangements of utterances) matters of automatic habit.

マスターしたとは、外国語の音組織に精通し文型を無意識に操作できるようになったとき、としている。そのようにするために教室では模倣や繰返しや文型のさまざまな練習をして無意識に操作できる習慣をつけようとする。

筆者はそのようには考えず、理性主義者の4番目のモットーを借用させてもらい、マスターとはその言語で思考できるようになったとき、と定義する。そのマスターの程度については、具体的に制限語彙内とか限定された文構造の自動的操作というようには設定できず、第一言語のレベルと同等のレベルに到達したとき、とする。日常低い程度の日本語しか使用しない人はその程度の外国語が話せれば満足するであろうし、高度の人は抽象

的思考ができるようになるまで満足できないであろう。従って、マスターは学習者の要求レベルによって異なる。レベルの高い人は第一言語と同等レベルでないと満足できないからマスターに到達するのは容易なことではない。

13. LL 授業の実践

以上、理論ばかりを述べてきた。では、それをいかに実践するか、それこそがもっとも重要なことである。いかに理論上合理的であっても実践されなければ意味がない。実践法は今まで述べてきた理論に立脚したものでなければならず、また、目標を実現できる教授法でなければならない。筆者の LL 授業の過程は次の通りである。

1. 学生が興味を抱き教育的にも意味のある内容の映像教材を選択、または、自作した（CNN 放送の録画とインターネットでトランスクリプトを探しワードで編集作成する）ものを使用して、まず、視聴覚的に体験させる（同時にテープに録音）。
2. 再度視聴する。その折次のような箇所では頻繁にビデオを止めてその静止画面を見ながら活発に英語で話し合っていく。
 1. 習得させたい単語や表現が聞こえたとき
 2. 事件の内容が話されたり興味ある行動が展開されているとき
 3. 静止画面の中に外国語学習上意味のある画像情報が写っているとき
 4. その画面を見ながら学生と現実の話ができるとき（以上の4つの話題は止めた箇所の台詞や行動の前後をも含めてさまざまな話し合いが可能である。話題に不足することはない。学生と一緒に活発に話し合っていく。学生に質問するときは各学生のレベルに合ったような質問をするとよい。答えられなかった場合はビデオを

戻して再度聞かせたりして教師は学生に恥ずかしい思いをさせないように答えをすぐに教えてよい。聞き取りが不得手な学生が多く、学生は言語的に白紙である、という前提からも。CNN 放送を聞き取るのは大変難しい。それでも静止画面を見ながら話し合っていくことは可能である。正確な言葉そのものの聞き取りを求めないでやさしい既知の英語でもよい。内容について話し合っていくよう配慮する)

3. 授業終了15分前頃、録音されているテープの内容とまったく同じにトランスクリプトされているプリント（記述のようにして自作したもの）を配布して、解説したり注意事項を説明する。

（次回の授業までに録音テープは聞いて理解できるようし、内容については自分で英語で言えるようにしてこさせる。単語や表現を覚えさせるのではない。自分の英語で言えるようにするのである。そのためには知らなかった単語や表現は覚えなければならないが、それらは覚えるのではなく英語で言えるようにする（思考できるようにする）のである。これは大変な課題であるが、このような訓練を通してこそ外国語で話す力がついてくる）

4. 次回の授業の始めで前回の授業で体験したことを皆で話し合っていく。

（個人的に話させるのもよい。教師が学生に次々と質問していくのは学生にとってより容易である。多人数の場合には学生に書かせるのもよい。しかし、テストと感ぜさせないよう配慮し、各自が教師と話しているつもりで自由にその応答を書くよう勧める。この4の段階が活発にかつ楽しく行えるようであれば授業は成功している、と言ってよい。学生は相当話せるようになっていくし、換言して、英語でも考えられる力がついてきている、と判断してよい）

5. 終了後次の場面なり次のニュースに進み上述の1～4の過程を繰り返す

返す。

14. 最終授業における学生の感想

The Sadrina Project を使い始めたのは1991年であった。それ以前の機械に依存した授業やヒアリング中心の授業から脱却して、ヘッドセットをはずして学生と直接話し合うようになってからは、学生との人間関係もよくなり授業も楽しくなってきた。テレビを、昔の紙芝居のごとくに使って、映像を見せては止めて、その静止画面を見ながら話し合っていく。授業終了後は incubation を重視して家でしっかりと覚えさせかつ言う訓練をさせた。次回の授業は前週の復習（通常テスト形式で筆者の多量の質問に筆答させる）で始まる。それ故、LL は毎回テストであると誤解した学生も少なくなかったが、習得した言葉や表現が多量に学べたことに感謝する学生が多数いたことも事実で、以上のように強制的に習得させたことが学生に感謝される結果となって現れているのであろう。

2004年1月8日、専任としての最終授業日、筆者は最終講義ならぬ最終授業を LL にて実施した。その折学生に短い感想文を書いてもらった。筆者が存在したことの証としてここにその一部を掲載し記録に留めさせていただく。

法学部1G S.H.さん

臨場感あふれる授業を1年間ありがとうございました。ビデオと映画のコラボレーションも面白かったです。

法学部1B T.K.君

先生の方法は今までの授業で実践形式の授業でとてもためになりました。(原文のまま)

経済学部1A Y.Y.君

先生の話し方は嘶家のように授業がおもしろかったです。

法学部 1 G R. N. 君

CNN のビデオを用いた授業は大変興味深く自宅でも見るようになりました。

経済学部 1 A H. S. 君

先生の授業はとても活気があり、授業についていくのは大変でしたが、とても集中でき、経済英語について多くを学べた気がします。

法学部 1 G M. E. 君

授業内容もただ生徒に関心を与えるだけでなく、ほくらにとって身になる内容ばかりでした。

法学部 2 E T. M. 君

河野先生の授業や学生に対する考え方や姿勢は、今現在教職課程をとっている私としてはとても参考になりました。私も教師になったら、河野先生のように笑顔で学生に接することができる教師になりたいです。

法学部 2 H S. N. 君

今日の最終授業を聞かせていただき先生の考えがとてもよくわかりました。一年間実践的な英語を学ばせていただいたわけですが私も将来英語を使う職につきたいと思っていますので、とてもいい勉強になりました。

経済学部 1 A M. Y. 君

先生の授業は今まで経験したことのないものばかりだったので最初はとまどいしましたが、先生の授業になれてくると、今までに受けてきた授業の中で一番楽しく自分からとりくめたと思います。また、「サドリーナ・プロジェクト」などの経済と深く関連した教材を使って、話し言葉で覚えられるというところにとってもひかれました。

法学部 2 B R. Y. さん

私は去年「英語Ⅲ」で *Sadrina Project* の教材をやり、とても楽しかったです。勉強したことを家で家族に話してあげたりもしました。今までこのような形式の授業をやったことがなかったので新鮮でもあり、とても身に付きました。

法学部 2 E M. M. さん

この夏のカナダ留学(?)で先生の素晴らしさ、実用性を実感しました。視覚と聴覚を使った英語の学習はすごいと思いました。この2つは英語、英会話学習の最重要な部分と本当に思いました。実際語学研修に行って帰ってきて先生の授業を受けまざまざと実感しました。しかも本当に使う会話表現ばかりで、今後英語を身近なものにしていきたいと思っていた私にとっては、まさにという感じでした。そして何よりも、本当に楽しく授業を受けることができたのです。

II. *The Sadrina Project* の内容分析

1. 教材の対象と目標

Nick McIver 著 *The Sadrina Project* は東南アジア諸国の協力を得て BBC の English by Radio & Television が1979年に制作したテキストとそれに付随するビデオ教材である¹³⁾。ビデオ教材として新しい教材とは決して言えないが、最近の教材には筆者の理論に合致した教材が見つからず、この教材こそは利用するに値すると判断して、この10年余使ってきたものである。話される英語が古いことはまったくなく、見られる映像は今でも英国やアジアに実在する各地であり、そこで展開される物語は学生を惹きつけて止まない大変興味がある物語であった。

教材の対象は Introduction に下記のように書かれている。

The *Sadrina Project* was devised, in the first instance, as an intermediate course for travelers – tourists as well as businessmen – and for those in the

travel business who provide them with services in, for instance, restaurants, hotels, airports and travel agencies. It also offers the general student a functional English course in an unusually colourful and naturalistic context.

アジア出張を命じられた若い主人公 David Foster は現地到着と同時に産業スパイに遭遇しいろいろと妨害される。英国の本社と絶えず連絡をとりながらアジアの各会社を訪問し現地の会社の営業状況を視察する一方、旅行者として美しいアジア各地を訪れてバック旅行に含むべき各地を調べていく。この二つの出張目的が筆者が担当する一般学生の口語英語の習得の目標に十分適合していると考えた。旅行者としての英語（日常生活上必要な英語）が学べる上に、仕事上必要な英語が多量に学べるからである。主人公 David は社長 Marsden からこのように言われて激励される。

Marsden: Well, we're delighted you're going on this reconnaissance for us. It'll be a great opportunity for you to show us what you can do in strange surroundings. Quite a challenge, in fact.

この企画に消極的な副社長 Ron に対し社長はこう断言する。

Marsden: Look, Ron, I've got my own doubts about the project, too. But at least we should try and find out what it has to offer Marsden Travel.

Marsden: Anyway, I've decided we should send someone out to take a closer look at Sadrina's companies in the East.

目的は明瞭である。主人公 David は社長の期待に沿うべく意気に燃えて英国を立つ。バック旅行に含むべき各観光地を訪れ実際に体験して調べてくること、一方、共同開発する提携相手の Sadrina が信頼できる会社で

あるかその営業状況を綿密に調べてこななければならない。

この二つの目的が学生の LL における習得のニーズに合致したことが学生に好評であった原因であったであろう。海外に行く学生が最近は特に多くなり英語で話せるようになりたい、また、卒業後仕事上英語を使用する必要性が高くなってきて学生は使える英語をぜひ習得したいと考えている。これらの要望にこの教材が答えられる内容であった。また、いながらにしてアジアや英国を見学でき、授業も面白いものであれば、この LL 授業が学生に好かれたのも納得できる。

2. 登場人物と主人公 David の訪問地

People in the story

Bill Marsden	Chairman of Marsden Travel
Ron Howells	Inclusive Tours Director
David Foster	Branch Office Manager
Sadrina	He controls a group of tour operators in South-East Asia
Paul Schultz	Managing Director of Geneva Travel
Helen Elliott	Travel Journalist

Places David visits

Singapore – Jakarta – Bandung – Bali – Manila – Hong Kong – (Singapore – Kuala Lumpur – Kota Bharu) – Bangkok

(かっこ内は時間不足のため省略した)

3. 生活上必要な基礎的語句・表現

3-1. 平叙文の前で言う短い慣用表現

Howells: I tell you, it won't work, Bill. There's nothing new about package tours to South-East Asia.

申し上げておきますけれど、そんなの（サドリーナ計画）うまくいきませんよ、社長。

2. *David:* I assure you, Miss Elliott, that's a pure speculation.

はっきりさせときますがね、エリオットさん。そんなの単なる思い過ごしですよ。

3. *Howells:* I warn you, when you're on this reconnaissance you'd better keep quiet about the purpose of your trip.

警告しておくけど、この視察旅行中出張の目的については誰にも言うなよ。

4. *Marsden:* Look, Ron, I've got my own doubts about the project, too. But at least we should try and find out what it has to offer Marsden Travel.

ねえ、ロン。私だってこの企画には疑問をもっているが,, (look の他に listen や see, say などと言う人もいる)

5. *Helen:* Well, you see, David, there's another company out here interested in exactly the same business.

いい、デイヴィッド、まったく同じようなことを考えている会社があるのよ。

6. *Foster:* You know, Miss Elliot, I think I'm going to need another drink.

Can I offer you one?

ねえ、エリオットさん、もう一杯呑みたいんですが、あなたもいかが？

(you see. も you know. も、また、look や see だけでもほとんど同じである)

7. *Howells*: Now, let's see. You're booked on a flight to Singapore on the 14th of February.

さて、お前は2月14日の飛行機を予約しているのだな。

(I see. わかりました You see. いいかい You'll see. 慌てるな (やがてわかりますよ) We shall (will) see. やがてわかるよ (様子を見ていよう), など状況に応じて意味合いは異なる)

8. *Foster*: Oh, don't start all that again, Helen. I've told you before. We've made no firm decisions yet.

言っただろう！ まだはっきりとは決ってはいないんだ。(before がなくてもよく、口論しているときなどに言う)

9. *Helen*: Ah, come on, Mr Foster. Everyone in the travel business here knows why you're in South-East Asia. As a matter of fact, we've been expecting you.

よしてよ、フォスターさん、こちらの業界の人は皆知っているのよ。

(抗議やうながすときなどに言う)

3-2. 質問する前に言う短い慣用表現

1. *Foster:* Thank you. Tell me, can I change my traveler's checks here?

すいません、こちらで旅行小切手現金化できますか。

2. *Helena:* Tell me something, Mr Foster. Is it true that Marsden Travel are moving into the inclusive tours business in this part of the world?

ちょっと教えてください、フォスターさん。おたくの会社がこの地域にパック旅行を始めるって本当ですか。

3. *Helena:* (to waiter) I wonder, can you help me? I'm looking for David Foster, who's here with Mr Sanchez.

すいません、フォスターさんをさがしているのですが。
(I wonder if you could help me. のように言わないで、I wonder
まで言ってその後直接疑問文で言うってしまう)

3-3. 短い会話表現

1. all right to~ 「～していいですか」

Foster: Hello, Rosemary.

Sales assistant: Hello, Mr Foster.

Foster: All right to go up?

Sales assistant: Yes, certainly.

上に行っていていいですか。

2. What about~? 「～はいかがですか」

Foster: So when should I leave?

Howells: You could go at the end of this week. What about the 5th?

この週末に行けるかね。5日はどうかな。

Sanchez: Sukiyaki for four, please. And some sake to drink. And something to start with. What about Sashimi?

Maria: Yes.

Foster: What's that?

Sanchez: It's raw fish.

お刺身はどうですか。

3. What do you think of~? 「～はどうですか」

Foster: What do you think of that, John?

John: Yes, that's nice, isn't it? A bit big to pack, though. I don't think I can take that. Let's see, let's try this. How much is that, please?

Girl: Two dollars.

あれはどうだろう、ジョン。

Foster: Do you like it?

Carol: Well, the colour's much too bright.

Foster: O.K.

Carol: I've found one.

Foster: Oh, let's have a look.

Carol: What do you think?

Foster Mmm. Looks nice. Excuse me, please. Could you help us?

どうかしら。

4. No need to~ 「~する必要はない」 No need. 「その必要はない」

Foster: Sorry about this, Roberto.

Sanchez: Oh, no need to apologize, David. By the way, you're very safe in here. You see, this bar is reserved for men only. No women allowed in here.

Foster: Really?

Sanchez: Well, we men deserve some privacy from time to time, don't we?

謝らなくてもいいですよ。

Howells: Foster won't be in Singapore. He's going to the Philippines.

Sadrina: Good. Then all I have to do is to meet him in Manila.

Howells: Would you like us to get in touch with Foster?

Sadrina: Oh, no need. I don't mind telexing my associate, Roberto Sanchez. He is in Manila and looking after Mr Foster.

その必要はありません。

5. Here. Here you are. Here's your~. 「はい」とか「どうぞ」などと物を人に渡すときに言う (There と言ったり, you が we となったり, you が it is となるときや, your は状況により a や the になる)

Helen: I'll do my best. I can't promise you anything.

Waiter: Here you are, sir.

Foster: Thank you. Could I sign for this, please? Oh, my room number. I've forgotten....

Helen: It's on the end of your key.

はい、どうぞ。

Porter: And if you require a television or a refrigerator, you call Reception.

Foster: Well, that's very kind. Thank you very much. Oh, just a moment. There!

Porter: Thank you.

Foster: Thank you very much.

はい、どうぞ。

Foster: How much, please?

Taxi Driver: 90p, please.

Foster: 90p. There's a pound. Keep the change.

Taxi Driver: Thank you very much.

はい、1ポンド。

Foster: Into Orchard Road. And the bank's here.

Receptionist: Yes, sir.

Foster: Fine. Thanks very much. Can I keep this?

Receptionist: Yes, sir, you can.

Foster: Here's the key. Thanks for all your help. Bye.

はい、鍵。

Clerk: There's your ticket back, and your passport. This is your boarding card for the aircraft. Your bus ticket's inside, and you get the bus through the doors at the end.

Foster: Thank you very much.

Clerk: Thank you. Have a pleasant flight, sir.

はい、切符とパスポートをお返しします。(返すときには back をつけてもよい)

6. Tell you what. 「教えてあげる」

Helen: All right. This is the one I've been looking for. The food is absolutely terrific. Now, what do you think you'd like?

Foster: Well, you seem to know about it. Why don't you order for me?

Helen: Tell you what. Oh! Look, David, could you grab that table?

Foster: Yes.

Helen: And could you order some beer?

Foster: O.K.

教えてあげるわ。

Sanchez: Well, David, what'll you have to drink?

Foster: Er—

Sanchez: Tell you what. Why don't you try our beer?

Foster: Oh, I'd love to. Thanks.

Sanchez: Eli, a beer for my guest and the usual for me.

そうだな (何がいいか教えてあげるよ)。

7. That's a pity. 「それは残念だ」(pity が shame になったり, What a pity!
What a shame! とも言う)

Foster: How interesting! And where's home?

Helen: Melbourne, Australia. Ever been there?

Foster: No. I'm afraid I haven't.

Helen: Ah, that's a pity. I expect you haven't time at the moment.
You've enough places to visit in this region, I believe. Well,
enough places for one reconnaissance, anyway.

あら, それは残念ね。

4. 懐かしい諸場面

4-1. 旅行者としての英語

1. サドリーナ・グループ本社への道順

Foster: [I like walking round strange cities, but I got completely lost
trying to find my way to the Sadrina offices.]

Foster: Excuse me. I was wondering if you could help me? I'm a bit
lost.

Man: I'm sorry. I'm from Thailand. I'm just stopping over for a
few days before going to Indonesia.

Foster: Oh, I'm sorry.

Man: Do you have a map?

Foster: Yes.

2nd Man: Can I help you?

Foster: Yes. I'm looking for Shenton Way.

2nd Man: Shenton Way? Oh, you'll have to take this lane, out to the main road. Keep to your right until you reach Maxwell Road. Turn into Maxwell Road and that gets you to Shenton Way.

Foster: I see. So I take this lane down here, down to the main road, turn right, up to Maxwell Road, and then into Shenton Way...

2nd Man: Yes. Into Shenton Way.

Foster: Well, I hope I get there. Thanks very much. Cheers. Bye-bye.

Foster: [I was glad to find the Sadrina group office at last.]

2. ホテル学校でのフルコースの注文の仕方, ウエイトレスの訓練

Student Waitress: Good morning, sir.

Foster: Good morning.

St. Waitress: Can I take your order, please?

Foster: Yes. I'd like to start with Shrimp Cocktail Calypso, please.

Tutor: Saparini, remember to repeat the order, please.

St. Waitress: Yes, sir. A Shrimp Cocktail Calypso.

Foster: Yes. Then Tenderloin Steak.

St. Waitress: A Tenderloin Steak. How would you like your steak done, sir?

Foster: Medium to rare, please.

St. Waitress: Medium to rare.

Foster: Then, to follow, vanilla ice-cream.

St. Waitress: Vanilla ice-cream.

Foster: And to finish with, some coffee.

St. Waitress: And a coffee.

Foster: Thank you.

St. Waitress: Is there anything else, sir?
Foster: No, no, that's all. Fine. Thank you.
St. Waitress: Thank you very much, sir.
Foster: Thank you very much. Thanks.

3. 日本料理店ですき焼きのことを英語で何と言っていたか

Sanchez: What will you have, Miss Elliott?
Helen: Oh, call me Helen, please? I'll have Sukiyaki.
Sanche: Sukiyaki. And you, David?
Foster: Well, do you think you could choose for me. I'm afraid I don't know much about Japanese food.
Helen: Why not try Sukiyaki?
Maria: It's actually made of thin sliced beef with vegetable, cooked in sauce, and it will be prepared right here at the table.
Foster: It sounds delicious. Fine, thanks.
Maria: I'll have Sukiyaki too, Roberto, please.
Sanch: Sukiyaki for four, please. And some sake to drink. And something to start with. What about Sashimi?
Maria: Yes.
Foster: What's that?
Sanchez: It's raw fish.
Foster: Oh, well. Good. Thanks.

4. インドネシアのバロンダンスとは

Foster: [The tour ended with a performance of the famous Barong Dance. Pilemon explained the meaning of the dance.]
Guide: [The dance shows the struggle between good and evil. Rangda

the witch represents the forces of evil and the Barong is a mythical creature representing good. As good and evil must exist together on earth, neither of them can win. The Barong's attendants come to fight Rangda. The witch puts the attendants into a trance so that they attack themselves. In the end, the Barong returns and Rangda's evil influence is removed.]

5. ゴルフ場での会話

Sanchez: Well, David, you played the last three holes beautifully. It looks as if you're going to beat me.

Foster: Oh, that's not likely. It's the first time we've been level, and I've been having a lot of luck.

Sanchez: Yes, but you've been lucky in other ways, too. What about Helen Elliott? I really don't see why you wanted to avoid her.

Foster: Well, I know she's nice in a lot of ways, but she knows a little too much about my trip out here and she'd like to know even more.

Sanchez: Well, I won't be able to tell her much. Sadrina said very little about you or why you're here. Another one of his secret plans, I suppose.

Foster: Does he have many secret plans?

Sanchez: Not many. But they're usually quite important and very successful.

Foster: That's encouraging. I hope he's successful this time. The fairway's clear. Are you ready for the next hole?

Sanchez: O.K. Let's go.

(Later, Foster drives off.)

Sanchez: It's not going to be easy beating that one, David. (Sanchez

drives.)

Foster: Shot!

4-2. 仕事上の会話

1. 社長と副社長の対立

Howells: I tell you, it won't work, Bill. There's nothing new about package tours to South-East Asia. Travel firms in this country have been operating them for years.

Marsden: Yes. But they've been operating mainly in the winter. Sadrina's proposal is for tours all the year round. It'll offer our regular clients exciting new places to go to. It's exactly what they want.

Howells: Well, we can't afford this project. It's too risky.

Marsden: Look, Ron, I've got my own doubts about the project, too. But at least we should try and find out what it has to offer Marsden Travel.

Howells: Even if it means going into partnership with someone you've never worked with, in a part of the world you don't know?

Marsden: Sadrina's been in the travel business in Singapore for twenty years. He's respected throughout South-East Asia. You know that, Ron. Anyway, I've decided we should send someone out to take a closer look at Sadrina's companies in the East.

Howells: Yes, I know. Do you still want to send David Foster?

Marsden: But Foster's got hardly any experience of the travel business. He's only a branch manager.

Marsden: Remember, Ron, I was the one who brought Foster into this company. He's been with us almost a year. He's done well,

extremely well. This project could give him the chance he needs to prove himself.

Howells: Maybe, but I...

Marsden: Remember, Ron, you and I have been in the travel business for a long time. What this company needs right now is young people with new ideas. That's why I'm sending David Foster. He's on his way here. When he gets here, I want you to give him a detailed briefing.

2. サドリーナの説得により社長は決意する

Sadrina: Well, perhaps we should begin to discuss the arrangements between us.

Marsden: Before we do that, Mr Sadrina, I must tell you that Mr Howells thinks we should cancel the project.

Secretary: Coffee, Mr Marsden.

Marsden: Thank you, Mary. Ron, would you...?

Howells: Certainly. Thanks. Black or white, Mr Sadrina?

Sadrina: Black, please. Mr Howells, why do you think we should cancel the project?

Howells: It's too costly. Marsden Travel can't afford it.

Sadrina: But we have agreed to share the costs as well as the profits. Surely a deal between us would be an excellent investment for Marsden Travel.

Howells: We might be investing a great deal of money for very little profit.

Sadrina: I disagree with you, Mr Howells. My impression is that the British public are most eager to be offered a new kind of holiday. And tourist boards in South-East Asia are most keen to

promote travel from Europe all the year round.

Howells: I still think there are too many risks for us.

Sadrina: I'm sorry to hear you say that, Mr Howells. Marsden Travel has a considerable reputation, and it would be a pity to miss an opportunity of increasing it. I am sure Mr Foster will confirm that in his reports to you.

Marsden: I think Mr Sadrina is right. It's a chance we shouldn't miss. And I think we should get in touch with Foster. We haven't reacted to his first report yet. Ron, I think you should telephone him right away.

Howells: I'll try to get him. It might take a little time, though. He's in Bali.

3. 会社訪問, 受付にて

Foster: [I was going to call on Sadrina's manager in Singapore. Sadrina himself was away.]

Receptionist: Fine, Mr Ramsay. I'll let Mr Ong know when he comes in.... Fine. Thank you. Bye-bye. Yes. Can I help you?

Foster: Good morning. My name's David Foster of Marsden Travel, London. I've come to see Mr Yeo. I haven't got a fixed appointment, but I think he's expecting me.

Receptionist: I'll let Mr Yeo know. Would you like to take a seat?

Foster: Thank you.

Receptionist: Mr Yeo. There is a Mr Foster from London to see you.... Right, I'll let him know.... O.K. Mr Foster, Mr Yeo will be out shortly.

Foster: Thank you.

Yeo: Hello, Mr Foster.

Foster: Hello.
Yeo: Roger Yeo.
Foster: Hello, Mr Yeo.
Yeo: Nice meeting you. Welcome to Singapore.
Foster: Thank you very much.

4. あわや企画がキャンセルされそうになって

Sadrina: You still don't seem convinced, Mr Howells. Surely you, and Mr Marsden, of course, can see the advantages of three firms sharing the costs of a project like this. Together we can offer a most attractive program of tours to South-East Asia.

Marsden: I appreciate your argument, Mr Sadrina, and would have appreciated it even more if you'd told us about negotiation with Paul Schultz.

Howells: Of all the tour operators in Europe, why did you go to Geneva Travel?

Sadrina: I have to tell you, gentlemen, that the first approach came from Mr Schultz, not from me.

Marsden: Of course I have to admit it's reasonable to think of an arrangement between ourselves and a third party, for this project, at any rate.

Howells: I don't agree. It's bound to interfere with our own plan.

Sadrina: Believe me, Mr Howells. Marsden Travel has nothing to lose by this deal and everything to gain.

Howells: As far as I'm concerned, any deal with Paul Schultz is a bad one.

Marsden: No, Ron, I think Mr Sadrina is right. It's difficult to find money these days. More and more companies are going to be

forced to share their resources and make deals like this.

Sadrina: Yes. I know that you and Mr Schultz are rivals, but in this case, I think that co-operation would be more profitable than competition. And with him, we would gain access to clients from Europe as well as U.K. I think you should consider his offer seriously.

Marsden: Mr Sadrina, are you absolutely convinced that this offer from Schultz is genuine

Sadrina: Mr Marsden, Geneva Travel needs business as much as you and I.

Marsden: Right, we'll consider Schultz's proposal carefully. Ron, I think David Foster will have to be told what's going on.

Sadrina: No problem. I am leaving London tomorrow. I will tell him myself.

Howells: Foster won't be in Singapore. He's going to the Philippines.

Sadrina: Good. Then all I have to do is to meet him in Manila.

5. 妨害の主犯は副社長，共犯者はヘレンであった

Howells: Did you get my cable?

Helen: Yes, yes. I got your cable, and I'm going to keep out of Foster's way for a little while. In fact, I'm moving out of Bangkok for a few days.

Howells: A few days? But don't you realise that Foster is going to find out about me pretty soon?

Helen: Ron, you worry too much about Foster. I can handle him. As a matter of fact, I'm seeing him in a few minutes.

Howells: You idiot! Once Foster knows I'm involved with you, I'm bound to lose my job.

Helen: Ron, there's no reason why we can't get this project off the ground before Sadrina. And when we've done that, you won't need your wretched job with Marsden. Foster won't get to know.

Howells: He's bound to. I tell you, Helen, we've got to pull out of this whole business. Now! Do you understand?
Helen?... Helen?... Helen?... Helen, are you still there?.....

Foster: Don't let me disturb you, Helen. I don't want to break up a beautiful friendship.

Helen: You can prove nothing. Absolutely nothing.

Foster: I don't think I've introduced you. This is Carol Cheng.

Carol: Pleased to meet you.

Foster: She's been working with an old associate of yours, Paul Schulz.

Helen: I see.

Foster: And she's been working particularly hard for the last few days. Carol, can I have the telex, please?

Foster: Thank you. "Last October, a small travel agency named J.R. Tours was registered in Singapore to promote cheap tours from U.K. to South-East Asia. One of the Directors is called Stanley Jackson. This we later discovered to be an assumed name. In the United Kingdom Jackson is known as..."

Carol: Ron Howells.

Foster: Shall we go on? "On that same board of directors is Margaret Robinson, alias Helen Elliott. She was also using an assumed name after her involvement in a travel business fraud in Hong Kong in 1974." Do you mind if I use the telephone, Miss Robinson?

6. 満足そうな社長の顔

Marsden: Gentlemen! I've heard the news and I'm taking the necessary steps to deal with Howells. Marsden Travel owes you an apology. But I hope you won't let this unfortunate affair stop the project.

Sadrina: Of course not. We must go ahead. As soon as possible.

Schultz: I agree. If it had not been for your David Foster, we could never have started this project together.

Sadrina: Yes. You see, Mr Marsden, you did pick the right man for the job, after all.

おわりに

以上、表題にあるごとく、前半は外国語教育における視聴覚的方法とその実際の教授法について述べた。後半はまったく論文の体をなしていない。後半、教材 *The Sadrina Project* の分析としたが記述は分析どころか内容の紹介や平易な口語表現の列挙でしかない。諸場面も受講した学生と筆者のみが思い出せるものである。最終授業の参加学生の感想文などを載せた記念論文集など他に皆無であろう。しかし、成城で過ごした足跡を筆者が後に回想するための記録として掲載させてもらった。最終授業に出席してくれた学生たちに感謝する意味もある。

前半、これにはこれまで筆者が歩んできた英語との関わりが反映されている。略歴の中で示してあるが、高校入学時英語の能力別クラスで最下位であったことが英語に挑戦する始まりであった。その後40有余年苦手であった口語の英語の習得に対する筆者の苦闘とその克服の過程がその中に示されている。

学生にはこの苦労をさせたくない。過去筆者が苦労したのは何故なのか、如何にしたら効率よく聞いて話せるようになるのか。学生にどのように教えたらよいのか、筆者は生涯かけてそれを追究してきたと言える。

実践してきた。前半に述べた理論とそれに基づいた教授法は、かくして辿り着いた現在における筆者の結論である、と言ってもよい。

最後に、末筆にて失礼ではあるが、筆者のためにこの記念論文集にご寄稿くださった、杉山隆彦先生、(亡くなわれた井上正蔵先生に代わってご寄稿下さった)小松博先生、西崎愛子先生、金沢公子先生、さらに、筆者の就任時学部長であられた中川和彦先生の各先生方に、真に光栄と思うとともに、若輩無能な筆者を心温かく受け入れ最初から最後までご指導ご支援くださいましたことに心から謝意を表します。

ありがとうございました。

引用文献

- 1) 中野照海, 「視聴覚教育の意義と方法」『視聴覚メディアの活用』, 日本視聴覚教材センター, 1992, pp. 3-17.
- 2) 波多野完治他編, 『新版視聴覚教育事典』, 明治図書, 1968, pp. 3-4.
- 3) 大内茂男他編, 『視聴覚教育の理論と研究』, 日本放送協会, 1979, pp. 19-20.
- 4) P. Riley, Viewing Comprehension: 'L'Oeil Escoute', *The Teaching of Listening Comprehension*, ELT Document Special, British Council, 1981, p. 145.
- 5) P. Riley, *op. cit.*, 1981, pp. 143-155.
- 6) Larry L. Barker, *Communication*, Prentice-Hall, 1984, pp. 66-69.
- 7) Leon A. Jacobovits, *Foreign Language Learning, A Psycholinguistic Analysis of the Issues*, Newbury House, 1971, pp. 85-90.
- 8) Karl Conrad Diller, *The Language Teaching Controversy*, Newbury House, 1978, pp. 55-71.
- 9) Gunther A. Mueller, Visual Contextual Cues and Listening Comprehension: an Experiment, *Modern Language Journal*, vol. 64, no. 3, 1980, pp. 335-340.
- 10) Jerry D. Feezel, Student as Stars: Integrated Language Arts Idea, *Speech Communication Teacher*, Winter, vol. 64, 1993, pp. 12-13.
- 11) Karl Conrad Diller, *op. cit.*, 1981, pp. 10-37.
- 12) Charles Carpenter Fries, *On Learning a Foreign Language as an Adult*, 1945, p. 3.
- 13) Nick McIver, *The Sadrina Project*, BBC, 1979, p.ix.